

4-25-2012

# 1970's Japanese Women's Liberation Movement: Its Issues and Successes

Maria L. Traxler

College of Saint Benedict/Saint John's University, mltraxler@csbsju.edu

Follow this and additional works at: [http://digitalcommons.csbsju.edu/asian\\_studies\\_studentpubs](http://digitalcommons.csbsju.edu/asian_studies_studentpubs)



Part of the [Asian Studies Commons](#)

---

## Recommended Citation

Traxler, Maria L., "1970's Japanese Women's Liberation Movement: Its Issues and Successes" (2012). *Asian Studies Student Work*. Paper 1.

[http://digitalcommons.csbsju.edu/asian\\_studies\\_studentpubs/1](http://digitalcommons.csbsju.edu/asian_studies_studentpubs/1)

This Presentation is brought to you for free and open access by DigitalCommons@CSB/SJU. It has been accepted for inclusion in Asian Studies Student Work by an authorized administrator of DigitalCommons@CSB/SJU. For more information, please contact [digitalcommons@csbsju.edu](mailto:digitalcommons@csbsju.edu).

“1970’s Japanese Women’s Liberation Movement: Its Issues and Successes” by Maria Traxler

「1970年代ウーマン・リブの成功と問題」(マリア・トラクスラー)

このプレゼンテーションは、1970年代の日本の女性解放運動、別名ウーマン・リブについてです。ここでは特に、ウーマン・リブが起きるにいたった社会的な要因、リブの直面していた問題、そしてリブが手にした成功について話します。

ウーマン・リブの運動は色々な要因が重なり合って成長しました。明治時代以降、特に第二次大戦後、日本の女性は高い教育を受けるようになったので、自分自身や女性にとって重要なことについて発言するようになりました。リブが影響を受けた日本のフェミニスト運動の一つは青鞥社でした。青鞥社は1911年に創立され、女性参政権のために闘ったり、女性にとって重要な問題について論じる新聞を出版したりしました。

1960年代には、多くの革新陣営や学生組織が様々な問題に対して抗義活動をしていました。たとえばベトナム戦争や、安保条約の改定や、日米帝国主義の問題についてでした。こうした集団の多くは「革新陣営」とみなされていました。しかし、これらの左翼運動に参加していた女性の一部は、革新陣営における偽善や性差別は広範で、女性問題への関心が希薄だと感じていました。政治活動になれていたこれらの女性たちは、自分たちの要求を実現するために、自らの運動を創造するようになりました。最もラディカルでメディアによく取り上げられた運動の一つはウーマン・リブと呼ばれました。

こうした運動の背景には、急激な高度経済成長の時代が終わったことがありました。戦後日本の経済は急成長したのですが、1970年代までには一時のようなスピードはなくなって来ていました。同時に、男性の長時間労働や、女性の労働人口からの締め出しなどの問題が、経済成長が引き起こした様々な問題とともに批判されるようになって来ました。アメリカやヨーロッパで同時期に似たリブ運動が起きたのも偶然ではありません。もちろん、西洋のリブが日本のリブを起こしたわけではありませんが、西洋のリブが日本のリブを刺激したとは言えます。こうした色々な要因から、日本のリブは発展しました。

1970年代には他のフェミニスト運動もありました。その中の多くがリブと似た目的を持っていました。ですが、リブの特徴の一つは性の解放と女性の性役割の批判

にありました。リブは家族や結婚や母性のヘテロノーマティブな考えに異議を唱えたり、女性が自分の体を管理する権利があるということを強調したりしました。リブの考えでは、母性や子育ては個人的な義務や権利にかかわる問題というより、社会全体がどう責任を取って行くべきかという問題でした。それに、女性の性や生殖に関する権利は国が統制すべきことではないと主張したので、墮胎に関する法や国民優生法の改悪に対しても闘っていました。

1972年に、リブのメンバーが新宿センターを創立しました。新宿センターでは、何人かのメンバーがリブを促進するために共同生活をしていました。多くのリブについての出版物を出したり、イベントやキャンペーンを企画したり、妊娠中絶、産児制限、「男性のリブ」などについてのティーチ・インを行ったりしました。さらに家庭内暴力を受けた女性や家出少女のための避難所や、訴訟経費扶助の相談所もありました。リブの様々なキャンペーンを通してシングルマザーやセックス産業の女性の支援活動もしていました。

こうしたキャンペーンでリブは多数の成功を収めました。国民優生法の改正が阻まれ、シングルマザーのKさんは自分の子供をその子供の父親に渡さないで済み、フェミニストの問題についての社会の意識も高められました。しかし結局、メンバーは運動の勢いを保つのを難しく思うようになって行ったので、リブの中心に燃えていた炎はやがて燃え尽きていきました。1970年代の後半から流行したのは、リブほどラディカルではなくて、よりアカデミックな「フェミニズム」の方でした。リブの運動者は、アカデミックなフェミニストや女性学の学生には、ラディカリズムが足りないと批判しました。それでも、リブの運動の進展とともに、大学や職場や政府や行政機関でも、フェミニズムの思想が広がってきたと言うことは事実です。リブはもう1970年代前半のような目立つ存在ではありませんが、一般の人々の間にフェミニスト的な意識を普及させ、その後のフェミニスト運動の基盤をつくりあげました。今日もリブの遺産が生きていると言えるでしょう。